

“つながる“上用賀児童館の子どもたち

取組の背景・目的

世田谷区児童館では、TEENS プロジェクトとして中高生世代を対象に行事を実施している。各館、中高生の意見に耳を傾けながら行事を企画し、中高生の来館のきっかけとなることを目的とし、居場所づくりを行っている。毎月の内容については、以下の「事業の概要」のとおりであるが、大規模イベントでも中高生が活躍している。しかしながら、小学生から中学生になると利用頻度は減り、居場所としての存在感を示すにはどうすればよいか、課題がある。



取組の概要

令和4年度

4月 卓球マシンやボードゲームであそぼう！

5月 ボードゲームであそぼう！

6月 ボードゲーム大会

7月 流しキャッチ選手権

(流しそうめんの竹を使って、いろいろなものを水で流す)

8月 サマーキャンプ

卓球マシンで夏の猛特訓！TEENS ver

9月 ボードゲームであそぼう

10月 ひげボ～☆あそボ～☆たのしむボ～☆ (おまつり)

軍手合戦～中高生の部～

11月 スポーツダーツ (講師来館)

けはいぎり選手権

(目隠しをした状態で五感を使い、相手の気配を感じ、相手を見つけたら棒でつくゲーム)

12月 年末お楽しみ会

1月 ボードゲームであそぼう！ (講師来館)

2月 いろいろ卓球選手権

3月 卒業おめでとう会 (仮)



工夫点・留意点

毎年夏に実施している宿泊を伴う「サマーキャンプ」では、中高生がリーダーとして活躍している。自分たちも楽しみながら参加者がいかに楽しむことができるかなどを考えており、リーダー及び縦割り班の中心として行動できるようにしている。

また、地域のみなさんの協力をいただいて秋に開催している「おまつり」でも、中高生がリーダーとして参加している。小学生のお店の補助だけでなく、職員とともにイベントの準備を行い、地域の方と関わることにより地域で活躍し、自信に繋げている。

日常活動では、ベーゴマや卓球、ボードゲーム、ボール遊びなどを友達と楽しむ姿がみられ、時には小学生とも一緒になって遊んでいるが、ここ数年力を入れているのは、遊びもうまく牽引してもらうという点である。

ボードゲームやスポーツダーツの講師を児童館に招いて中高生向けイベントを開催し、中高生に新しい遊びや楽しみ方を知ることができるよう支援している。その後、参加した中高生が小学生に教えながら楽しさを伝えていくことで、小学生や他校の中高生ともさらに交流が広がっている。

職員の異動があっても、彼らが地域に根付くよう、館としてその時々との関係性を大切にしている。中高生が来館した際には、彼らの思いや雰囲気大切にしながら職員が積極的にコミュニケーションをとることで関係をつないでいる。普段のかかわりの中で、中高生がやりたいこと、興味があること、話したいことに耳を傾けている。

日常の会話の中から、家庭や学校での出来事、困りごとの相談を聞くことも多い。必要に応じてアドバイスを行い、関係機関につないでいる。

中高生が活躍する機会を作り、達成感を味わうことを繰り返すことで自信をつけ、学校以外でも力を発揮する場所となるよう心掛けている。

また、中高生になると保護者の顔が見えづらくなるが、機会を捉え積極的に保護者とも話せる場面を作り、児童館での活躍の様子を伝えることで、家族まるごとの関係づくりを大事にしている。

取組の効果

イベントごとに小学生のお手本となる姿を見せ、すすんで小学生の面倒を見る中高生が多い。小学生から「今日はあのお兄さんお姉さんいないのかな？」との声が聞かれることもあり、良い関係を築いているように感じる。小学生にとって良いお手本となっていることは間違いなく、その背中を追って彼らが中高生になったときにまた新しい世代のモデルとなることを期待する。

また、以上のような受容を基本としたかかわりや楽しめる活動を通して、児童館が居場所として認知されてきている。学校に行っていない中学生が児童館には来館しており、近況を学校の先生と共有することもある。居心地の良い居場所として利用してもらい、側面支援をしながら見守っている。

継続した心を通わせる関係づくりをすることで、何年か児童館を離れることがあっても、何かの拍子に思い出し、来館することも多い。また、彼らが今度は親となり自分の子どもを連れてくるなど、ずっと関係性が続いていくことが醍醐味である。

課題・今後の展開

来館している中高生のやりたいことを TEENS プロジェクトで実施しているが、当日までの準備や運営までを事前に一緒になって考えることはさほど多くはない。今後、中高生に主体性を持たせていくことが課題であると感じる。

また、居場所がない中高生にも児童館の存在をどんどん発信していく必要がある。そのため、中高生のニーズを探りながら児童館としてできることは何か常に職員間で考え、地域や関係機関と連携しながら進めていく。

